

クリスマスおめでとうございます。今日は教会のクリスマス、四本のローソク全部に火が灯りました。待ちに待ったクリスマスがやっとやって来ました。子どもの教会では先週、クリスマス会をしました。きのうは信愛幼稚園でクリスマス会をしましたけれども、今日は教会のクリスマス。今日は、大人と子供、みんなで「クリスマス」のお祝いをしたいと思います。

ところで、クリスマスと言いますと、イエス様のお誕生をお祝いする日ということで、いろいろなお話が語られます。東の国から星に導かれてやって来た三人の博士さんたちのお話や、野原で野宿していた羊飼いさんたちのお話、また、その羊飼いさんたちに現れた天使のお話だとか、そのほか、クリスマスに関連して、サンタクロースのお話だとか、トナカイさんのお話、もみの木のお話、それから先週の子どもの教会では、「クリスマスにすばらしい贈り物をすると鐘がなる」という「不思議な鐘」のお話(紙芝居)を見ましたけれども、そういうクリスマスのお話が沢山あるんでありますね。で、今日は、そういう沢山あるお話の中から一つ、「宿屋さんのお話」を少ししてみたいと思います。宿屋さんと言いますと、イエス様が生まれた時に、泊めてあげることが出来なかった、あの宿屋さんですけれども、今日のお話は、宿屋さんの子どものお話であります。

アメリカのある村に、白い十字架の、小さな教会がありました。日曜日の朝になりますと、教会の鐘が鳴ります。そうしますと、あっちの家からも、こっちの家からも、聖書と讃美歌をかかえた人たちが教会にやって来ます。おじいさんもおばあさんも、小さな子どもたちも、赤ちゃんまでも、白い十字架の教会にやって来ました。

ある年の 12 月はじめのことでした。クリスマスの日に毎年行なわれる、イエスさまの降誕劇(ページェント)を、その年は子どもたちが担当することになっていました。そこで、教会学校の先生たちは、子どもたちを全員集めて、その劇の相談をしました。そして、役割を決めました。マリアさんが決まりました。ヨセフさんも決まりました。羊飼いさんたちも、東の博士さんたちも決まりました。それに、牛さんたち、馬さんたち、羊さんたちも決まりました。天の使い、天使たちも決まりました。こうして、子どもたち全員が、それぞれ自分の役をもらいました。

ところが、知恵おくれの子が役からもれていることに気がつきました。先生たちは、すぐに相談をして、その子のために、一つ役を作りました。それは、馬小屋のある宿屋の子ども役でした。セリフは一つ、「だめだ。部屋がない。」そして、うしろの馬小屋を指さす役です。男の子はよろこびました。「ぼくもイエスさまの劇に出るんだ。ぼくだって、劇に出るんだ」と言って、とっても喜びました。「だめだ。部屋がない。」男の子は一日に何十回も、何百回もくりかえして練習をしました。くる日もくる日も練習しました。

いよいよ待ちに待ったクリスマスの日がやってきました。教会の鐘の音が村のすみずみにまで、クリスマスの礼拝の時間を知らせました。白い十字架の教会は、たちまちいっぱいになりました。プログラムが進んで、いよいよ子どもたちのクリスマスの劇です。そして、その劇も、後半部を迎えました。長旅で疲れ果てたヨセフとマリアが、とぼとぼと歩いて、ベツレヘムにやってきました。もう陽はとっぴりと暮れています。そして、あの男

の子が立っている宿屋にたどりつきました。

「すみません。私たちを一晩とめてください」。さあ、男の子の番です。おとうさんも、おかあさんも、教会学校の先生たちも、思わず手を組んで、神さまにお祈りをしました。「神さま、うまくできますように...」。男の子は、大きな声でいいました。「だめだ。部屋がない」。それから、うしろをむいて、馬小屋を指さしました。

「よかった。じょうずにできた」。みんな胸をなでおろし、でも、その時です。馬小屋にむかって、肩を落として歩いていくヨセフとマリアをじっと見送っていたその男の子が、突然、ワッと声をあげて泣き出しました。その男の子は走って行って、泣きながらマリアさんにしがみついて言いました。「マリアさん、ヨセフさん。馬小屋に行かないで。馬小屋は、寒いから。イエスさまが風邪を引いちゃうから、馬小屋に行かないで、馬小屋に行かないで」。教会学校の先生たちが舞台にとびあがり、そして、マリアさんにしがみついて泣いている男の子を引き離しました。劇は、だいじなところで、しばらくの間、中断してしまいました。でも、この村の長い歴史の中で、これほど感動的なクリスマスの劇は、あとにも先きにもなかったといえます。

知恵遅れのこの子は、劇を台無しにしてしまいました。でも、多くの人に感動を与えました。どうしてでしょうか。この子は、本当にイエス様がかわいそうだと思っただけであり、馬小屋で生まれることになっているイエス様。馬小屋は寒いのであります。いくら「わらの寝床は温かい」なんて言っても、やはり馬小屋は寒い。だから風邪を引いてしまうかも知れない。この子は、イエス様がかわいそう。だから、「マリアさん、ヨセフさん。馬小屋に行かないで。行かないで。」と、泣きながら止めたのであります。

私たちは、イエス様は馬小屋で生まれたと簡単に言います。それは「宿屋がいっぱいで、宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから」と、いとも簡単に言う訳であります。でも、この男の子は、イエス様が風邪を引いてしまう、イエス様がかわいそうだと、本当にそう思っただけでありますね。だから、泣きながら「マリアさん、ヨセフさん。馬小屋に行かないで。馬小屋に行かないで。」と、止めたのであります。私たちに、このような感性というのでしょうか、こういう思いやりのあるやさしい気持ちがあるのでしょうか。イエス様に対して、「イエス様がかわいそうだから」という、そういう思いやりのあるやさしい気持ちがあるのでしょうか。

イエス様に対する信仰ということ、私たちはよく言います。神の御子イエス・キリストを信じる信仰。とっても大切であります。でも、この子のような、やさしい思いやりのある気持ち、私たち、どこかに置き忘れて来てしまっていないでしょうか。知恵遅れのこの子は、劇を見ていたみんなに、そして、私たちに、私たちが忘れかけていた大切なことを思い起こさせてくれたのではないのでしょうか。クリスマスは、単に2000年前、神の御子イエス様が生まれたということだけではなくて、私たちにまた、人のことを思いやるやさしい気持ちを思い起こさせてくれる、そういう時でもあるのだと思います。

クリスマス、私たちも、こういう人のことを思いやるやさしい気持ちをもって、イエス様のお誕生をお祝いできたらと思います。